

指定保育士養成施設におけるオンライン実習の可能性と課題に関する研究 —オープンコーディングによる探索的な分析を通して—

浅井 拓久也 森下 嘉昭

1. 研究背景と課題設定

新型コロナウイルス感染症の流行によって、2020年4月7日に緊急事態宣言がなされ、5月25日まで継続された。このため、指定保育士養成施設(以下、養成施設)の様々な授業、特に保育所や幼稚園の場で実践経験を積む保育・教育実習は大きな影響を受けた。緊急事態宣言解除後も実習生、保育者、保護者の心理的な不安は大きく、実習が再開できない状態が継続されていた。

そこで、厚生労働省や文部科学省は実習の代替措置によって単位取得を認める方針を明確にした¹⁾²⁾。厚生労働省(2020)は「養成施設にあっては、新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと」とした。文部科学省は「弾力化通知により、教育実習の科目の総授業時間数のうち、3分の1を超えない範囲を大学等における授業により行うことは差し支えないこととしているが、1改正等の趣旨で述べたような状況も踏まえ、令和2年度に限り、教育実習の科目の総授業時間数の全部又は一部を大学等が行う授業により行うことができることとする。その際、教育実習の科目であることが前提であることから、大学等が授業を行う場合は、教育実習に相当する教育効果を有することが認められるものであり、かつ、学校教育の実際を体験的、総合的に理解できるような実習・演習等として実施すること等に努めることが強く期待されること」とした。

しかし、代替措置の具体的な内容や方法は養成施設に委ねられていたことから、当初は指導案作成や自宅での模擬保育の様子を撮影した動画の提出等がなされていたが、これらは通常の授業内容や方法と大きく変わるものではなく、保育・教育実

習の目的を十分に達成することはできなかった³⁾。そこで、Google MeetやZoom等のアプリを活用したオンライン(双方向型)による実習(以下、オンライン実習)の活用が検討され、実験的に実施されてきた。

しかし、養成施設では実際に保育・教育の場にて実習することを前提としてきたことから、オンライン実習の経験の蓄積はなく、手探り状態で進めざるを得ない状況になっている。そこで、本研究ではオンライン実習の可能性と課題を探索的に明らかにして、保育者養成の新しいあり方の示唆を得ることを目的とする。

2. 対象・方法

(1) オンライン実習の概要

オンライン実習は、以下の通り実施した。まず、参加者は養成施設(私立短期大学)の1年生と2年生、養成施設の教員2名、保育者5名(施設長含む)、保育所運営者3名とした。参加者にはGoogle MeetのURLを事前に伝え、参加者全員が同時に参加した。実習生や教員はスマートフォン、パソコン、タブレットを使用して自宅からオンライン実習に参加した。保育者や保育所運営者は、保育所や運営本部から参加した。インターネット回線の不具合によって一時的に退室することもあったが、オンライン実習は120分実施した。

オンライン実習先となる保育所は首都圏にある公立保育所であり、園児は乳児0名、1歳8名、2歳4名、3歳8名、4歳8名、5歳6名の合計34名であった。保育室の配置は図1の通りであった。なお、図1内の「順序」はオンライン実習で見学した順番とする。

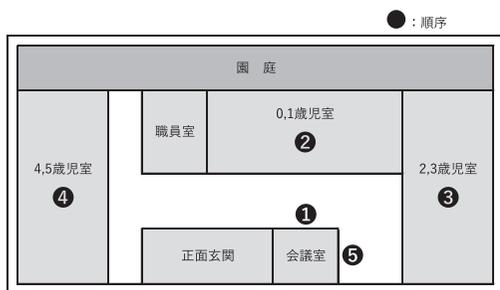


図1 各保育室の配置

オンライン実習では、まず施設長から保育の方針や方法等の保育所の概要の説明があった。その後、月齢ごとの指導計画を実習生が確認した後で保育者が各保育室にスマートフォンやタブレットを持って入り保育室内の様子を配信した（各保育室20分程度）。映像と共に保育者が保育の意図や環境構成について説明し、実習生は随時質問できる形式で進めた。教員も適宜質問し、実習生の学びを支援するようにした。



図2 教員が指導案の要点を説明する様子

(2) 調査概要

調査対象者は、養成施設の1年生(12名)、2年生(8名)とした。本研究では実験的な取り組みであることから参加者は少数とし、学年や保育・教育実習経験の有無等の偏りがないように選定した。また、本調査は2020年8月に120分実施した。

オンライン実習後に、実習生はGoogle Formを通して無記名式の選択式質問や自由記述式質問(「オンライン実習を受講した感想を自由に書いてください。」)によってオンライン実習の感想を回答した。本研究では、実習生の自由記述式の回答に見られるオンライン実習の優位性と課題を抽出した。

(3) 分析方法

分析方法は、自由記述で得られた回答を抽象的な概念に置換するオープンコーディングを採用した。自由記述式を採用した理由は、選択式ではあらかじめ複数の選択肢が用意されていることで、回答者が意識や自覚していなかったことが選択され、選択式の質問から得た結果と実態が乖離する可能性がある。しかし、自由記述式では回答者がそもそも意識や自覚していないことは記述されにくく、回答を記述することは選択肢を選ぶよりも回答者の負担が大きいことから、回答者が重要性を感じていることが優先して記述されやすいことからである。

また、オープンコーディングを採用した理由は、オープンコーディングは先行研究が少ない領域で探索的に研究を実施する際に有効であることや⁴⁾、本研究の展望である量的分析を実施するための変数を得るためにはオープンコーディングによって得られた概念が有益であることである。分析者の恣意性を排し、分析の信頼性を担保するため保育を専門とする3名の研究者でオープンコーディングを実施し、切片化、コード、カテゴリを比較し、議論を経て最終決定した。

(4) 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査対象者が回答する前に、調査目的と内容、回答は学術研究の目的でのみ使用されること、回答と保育・教育実習の評価は無関係であること、自由意志であること、回答は無記名式で行うこと、回答は途中で放棄することや提出を拒むことができること、Google Formのデータは一定期間経過後に破棄すること等が口頭と文章で説明された。回答の提出をもって調査対象者の同意を得たとした。

3. 結果と考察

オープンコーディングでは、オンライン実習の可能性と課題に関して自由記述から112個の切片を抽出した。切片から18個のコードを作成し、最終的に8個のカテゴリとした。オープンコーディングの結果が表1である。

表1 オンライン実習の優位性と課題

実際の回答例 (件数)	コード	カテゴリ (番号)
説明を受けながら見ることで、自分では気付かなかったことに注目して学んでいけると感じた。(13)	映像と説明がセットでわかりやすい	保育内容の理解が深まる (①)
オンラインだと録画をしておけばまた見直してよりたくさんの方に気づけるかなと思いました。(9)	繰り返し確認できる	
年齢に応じて自分が援助しながら関わる姿が想像できたと思います。(5)	年齢別の保育が比較しやすい	
チャットで質問ができるので、質問のタイミングを気にしなくてよいのがありがたいです。(5)	チャット機能等で質問がしやすい	保育者に質問しやすい (②)
現場の実習では話を聞くタイミングが難しいけどオンラインだと話を聞きやすいのでいいと思いました。(9)	質問のタイミングがわかりやすい	
感染者数が増えてしまっている今、感染を気にしないで実習ができるのはよいと思う。(4)	体調が少々悪くても実習ができる	事前準備の負担が軽減できる(③)
検便や体温測定を忘れてしまう心配がないだけでも嬉しい。(3)	検便や体温測定をしなくて済む	
オンラインを活用することで、複数の保育園で実習ができました。(9)	複数施設での実習が可能になる	多様な実習が可能になる (④)
普通の実習だと全ての時期において実習することが出来ないため今回のようなオンライン実習をしてくださると、色々な時期の実習が選べるかもしれないのでよいです。(5)	様々な時期の実習が可能になる	
先生と一緒にいることで実習先の園からひどいことをされない安心感がとても強い。(11)	教員が参加することで心理的な安心が得られる	安心して実習ができる (⑤)
普通の実習は1人でするけど、オンライン実習だと友達もいるので安心できるし、発言からなるほどと思えることもあった。(5)	友だちの意見から学ぶことができる	
今回経験してみて、画面が固まったり、途中音声が開かなくなったりと何かしらのトラブルがあったので、ネット環境がどうかは大事だと思った。(9)	自分や園のネット環境がよくない	アプリやデバイスの使い方がわからない (⑥)
今回はいつものmeetだったのでよかったけど、日頃の授業で使わないアプリでしかも実習というのは不安です。(2)	授業で使っていないアプリを使うのは抵抗がある	
失礼に当たらないようなオンラインでのマナー等を自分が全く知らないことを不安に感じた。一般的にマイクは常にオフしておくべきなのか、カメラはどうしておくべきのかなど、初歩的なところから確認することができるかなと思った。(3)	オンライン実習のマナーがわからない	
やはり、子どもと関わっているイメージがわからないことが大きくて、オンライン実習は役に立たないと思います。(4)	子どもとの関わりがイメージしにくい	実際に自分ができるかイメージわからない (⑦)
保護者支援とか学べないと思った。いつもの実習以上に、親御さんとの接し方はオンラインではなかなか難しいかなと思いました。(3)	保護者との関わりがイメージしにくい	
今回オンライン園見学をしてみて、自分の目でないと見れないところがあるなと思いました。歩いている間の廊下の壁面や作品を飾っているところも直接行く園見学では見れますが、今回は見るできませんでした。(8)	保育室以外の廊下やトイレなどの様子がわからない	保育室以外の環境がわからない (⑧)
自分が見たいところや長く見たいところかが自由に見れないので、実習っぽくない気がする。(5)	自分の関心に合わせて視点を変えることができない	

オンライン実習の可能性として、①「保育内容の理解が深まる」、②「保育者に質問しやすい」、③「事前準備の負担が軽減できる」、④「多様な実習が可能になる」、⑤「安心して実習ができる」の5つのカテゴリとしてまとめることができた。

カテゴリ①「保育内容の理解が深まる」は、「映像と説明がセットでわかりやすい」、「繰り返し確認できる」、「年齢別の保育が比較しやすい」のコードをまとめたカテゴリである。実習生が保育所等にて行う実習では保育者の動きから保育の意図や配慮を実習生自身が見抜く必要があるが、映像に保育者の説明が加わることでその負担が軽減されていることがわかる。また、既存の実習では実習後の振り返りのために逐一メモを取ったり、実習中のメモが禁止されていたりする場合は記憶しておく必要があるが、オンライン実習では録画機能があることから、この負担も軽減されていることがわかる。さらに、既存の保育では数日ごとにそれぞれの月齢の保育室にて実習を行うが、オンライン実習では全月齢の保育を同時進行で確認することができることから、実習生にとっては月齢別の保育の特徴を理解しやすくなっていることがわかる。

カテゴリ②「保育者に質問しやすい」は、「チャット機能等で質問がしやすい」、「質問のタイミングがわかりやすい」のコードをまとめたカテゴリである。既存の実習において実習生が感じる難しさの一つが多忙な保育者への質問のタイミングである。オンライン実習ではチャット機能があったり進行の都合上から保育者が質問のタイミングを積極的に用意したりすることから、既存の実習の課題が解決されていることがわかる。

カテゴリ③「事前準備の負担が軽減できる」は「体調が少々悪くても実習ができる」、「検便や体温測定をしなくて済む」のコードをまとめたカテゴリである。既存の実習では、実習前に一定の体温や症状が見られた場合は実習延期や中止となることが多い。このため、2年しかない短期大学では実習生の履修計画に大幅な変更が必要となり、実習生に負担を強いるものであった。しかし、オンライン実習は基本的には自宅から受講できることから、体調管理に関する不安が軽減されていることがわかる。

カテゴリ④「多様な実習が可能になる」は「複数施設での実習が可能になる」、「様々な時期の実

習が可能になる」のコードをまとめたカテゴリである。既存の実習では、前期実習と後期実習は同一の実習施設で行うことや、また物理的にも時間的にも実習を通して得られる保育の経験は限定的であることから、実習生自身がボランティア活動や保育所訪問によって多様な保育を学ぶ必要があった。オンライン実習では、実施方法にもよるが、物理的にも時間的にも相当な融通が利くことから、多様な実習を実現できることを実習生が感じていることがわかる。

カテゴリ⑤「安心して実習ができる」は「教員が参加することで心理的な安心が得られる」、「友だちの意見から学ぶことができる」のコードをまとめたカテゴリである。既存の実習では、実習開始後に実習生と教員が話し合う機会は基本的には訪問指導時に限られていた。そのため、実習施設と実習生が適切な関係を構築できない場合は、実習が円滑に進まないことが課題であった⁵⁾。オンライン実習では、教員が実習生のそばにいない中でも自律的に実習を進めることが重要ではあるものの、教員も自由に参加することができることから、実習生にとって心理的な安心を与えていることがわかる。

また、オンライン実習の課題として、⑥「アプリやデバイスの使い方がわからない」、⑦「実際に自分ができるかイメージわからない」、⑧「保育室以外の環境がわからない」の3つのカテゴリとしてまとめることができた。

カテゴリ⑥「アプリやデバイスの使い方がわからない」は「自分や園のネット環境がよくない」、「授業で使っていないアプリを使うのは抵抗がある」、「オンライン実習のマナーがわからない」のコードをまとめたカテゴリである。オンライン実習では、実習生と実習施設双方のネット環境が重要であるが、必ずしも全ての実習生が光回線や通信容量無制限のルータやプランであるとは限らない。そのため、オンライン実習を実施する際はネット環境が十分ではない実習生への支援が必要であろう。また、日頃の授業で使用していないアプリを使用することも実習生にとっては不安要素になることがわかる。そのため、オンライン実習を実施する際は、日頃の授業で使用しているアプリと統一する必要があるだろう。さらに、既存の実習におけるマナーや礼儀についてはこれまでの指導が有効であろうが、オンライン実習に特有のマナー

や礼儀について実習生が不安を感じていることがわかる。そのため、実習開始前に、オンライン実習開始や完了時の挨拶の仕方、チャットでの質問の仕方等に関する事前説明を行う必要がある。

カテゴリ⑦「実際に自分ができるかイメージわからない」は、「子どもとの関わりがイメージしにくい」、「保護者との関わりがイメージしにくい」のコードをまとめたカテゴリである。既存の実習とは異なり、実習生自身が保育をしているわけではないことから、保育者の動きや意図は理解できても、自分が実際にできるかどうか不安を感じることがわかる。この点はオンライン実習の限界であると思われるが、保育の節目で実習生自身がこの場にいたらどうするかというような思考実験の時間を取り入れる等の改善する方法を検討していく必要がある。

カテゴリ⑧「保育室以外の環境がわからない」は「保育室以外の廊下やトイレな様子が見えない」、「自分の関心に合わせて視点を変えることができない」のコードをまとめたカテゴリである。既存の実習では実習を行う保育室以外の環境構成や様子を確認することができ、こうした情報は実習に有益であるが、オンライン実習では実習生の都合で自由に視点を切り替えることができないことが課題であることがわかる。実習生が実習施設に対して視点の切り替えを要請することは心理的な負担になることが予想されるため、オンライン実習に教員が参加することが好ましいか否かは検討する必要があるが、教員が参加する場合は実習施設に働きかけて多様な視点を確保することが必要であろう。

4. 総合的な考察と今後の課題

実習生の自由記述からオンライン実習の可能性として5つ、オンライン実習の課題として3つのカテゴリにまとめることができた。これらを踏まえて、実習生には意識されていないが、教員側が考えるべき点があることがわかる。

まず、実習の評価（評価項目と評価方法）である。既存の実習で達成されるべき目標とその評価と、オンライン実習のそれは必ずしも同一ではない。そのため、全面的であれ部分的であれオンライン実習を実施する場合は、オンライン実習に即した評価を検討し、実習生と実習施設に提示する必要がある。

また、訪問指導のあり方である。実習生が訪問指導時に意義を感じる指導は不安の緩和や激励につながる指導であることからすれば⁶⁾、オンライン実習に教員も参加することで（参加しているだけでも）訪問指導と同様の効果が得られるであろう。しかし、養成施設から離れて実習生自身が自律的に実習を行うことで学ぶことも多くあるという観点からはオンライン実習に教員が参加することは必ずしも好ましいことばかりではない。そのため、オンライン実習での教員の訪問指導のあり方についても検討する必要がある。

オンライン実習はその内容と方法も多様である。そのため、既存の実習かオンライン実習という二者択一の議論を拙速に開始する前に、オンライン実習の経験を蓄積し、オンライン実習を促進する要因や停滞させる要因を抽出し、その成果を正確に分析していく必要がある。

本研究は探索的な研究であることから、調査対象者数は限定的であった。そのため、調査対象者数を増やして本研究で得られた知見を再検討する必要がある。また、オンライン実習の成否は実習生や養成施設だけではなく、実習施設的环境や姿勢も大きな影響を及ぼす。そのため、実習施設も含めた調査や分析を行う必要がある。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2020)「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」
- 2) 文部科学省 (2020)「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について（通知）」
- 3) 厚生労働省 (2018)「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」
- 4) 日高友郎 (2019)「オープンコーディング (open coding)」、サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的研究法マッピング』、新曜社、pp.72-79.
- 5) 浅井拓久也・浅井かおり (2019)「保育所実習における訪問指導のあり方の検討 - 実習生にとっての訪問指導の意義に着目して - 」、『東京未来大学保育・教職センター紀要』(6)、pp.1-10.
- 6) 浅井拓久也・森下嘉昭 (2019)「保育所実習に対する意欲に影響を及ぼす要因 - 実習生が抱

く指導者としての保育士像に着目して - 」、
『山口芸術短期大学研究紀要』(51)、pp.133-
139.

謝辞

本研究の実施には、北澤明子先生、徳田有里先生はじめ多数の方にご協力をいただきました。記してお礼申し上げます。